

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島県安芸方言における感覚・感情語彙の変化：「タイギー」「シワイ」「ヤネコイ」について
Author(s)	小林, 晃大
Citation	論叢 国語教育学, 16 : 1 - 12
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50688
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050688
Right	
Relation	



広島県安芸方言における感覚・感情語彙の変化

—「タイギー」「シワイ」「ヤネコイ」について—

小林 晃大

1 はじめに

本稿では、筆者が行ったアンケート調査の結果をもとに広島県安芸地域における感覚・感情語彙の使用状況について報告する。特に、意味が部分的に重なりと考えられる「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」の3語を取り上げ、先行研究から分かるその地理的分布や用法・意味の変化を、中央語史を参照しながら示す。その上で現在の広島県安芸地域での用法・意味を年齢差も含めて考察し明らかにする。

2 調査概要

2.1 調査地概要

神鳥（1998）は広島県域の方言は旧国制の境に従って、安芸方言、備後方言の二方言に区画することができるとしている。さらに、旧国制の境だけでなく、安芸と備後の北半を支配していた浅野藩と、備後南部を支配していた福山藩との領域の間にも方言差がみられるとしている。

本研究での調査対象地域は広島県安芸地域である。図1が調査対象地域を示したものである。主として広島市域と安芸郡府中町が調査対象地となる。当該地域は、安芸地域の政治・経済の中心地であり、安芸地方全体の言語変化を先導していると推測される。また、筆者自身がこの地域の出身であり、日常の言語コミュニケーションを通して本稿で扱う現象に気づいたことが本研究の背景となっている。



図1 広島県の方言区画と本研究の調査地点（小西 2017 の図をもとに改編）

2. 2 調査情報

調査は、老年層から若年層を対象にしたアンケート調査である。実施に際しては、府中町の公民館にご協力をいただいた。2018年9月下旬から11月上旬の間、約1か月の期間を設け、公民館を利用した人に回答を依頼した。さらに、地元の方にも協力を仰いだ。本稿では出身地が広島県安芸地域にあたる人の回答のみを集計し分析を行う。表1が回答者の出身地の内訳と年齢層である。外住歴は問わず、出身地と現住所のみを問うている。

表1 回答者の内訳

世代別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	無回答
安芸高田市							1	1	
広島市安佐南区		1	1	1			1		
広島市安佐北区		1	1	1		1			
広島市東区		1		1	1		1		
広島市西区		5			1		1		
広島市中区		1		1	2	3	1	1	
広島市南区			1		3		1	1	
広島市佐伯区		1				1	1		
広島市安芸区				1					
広島市（不明）		1				1		1	
廿日市市		2							
安芸郡府中町	1	3	4	5	4	8	10	5	2
安芸郡海田町					1		1		
安芸郡熊野町		1							
安芸郡坂町				1					
東広島市		8							
呉市		1			2	1		1	
総計（人）	1	26	7	11	14	15	18	10	2

3 先行研究

対象の「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」の3語の意味について辞典や広島県の方言資料をもとにまとめる。

3.1 「タイギー」

「タイギー」は、『日本方言大辞典』によると、「おっくうだ。めんどうだ。つらい。体がだるい。」という意味があり、使用地点（同辞典の出典となる方言資料の対象地点）として広島県能美島、安芸郡、山口県大島、香川県、愛媛県が挙げられている。戦前の広島縣師範學校郷土研究室による調査結果に基づく記述（1932）には、「身体のだるいこと」とある。また村岡編（1980）の『広島県方言辞典』では、「しんどい」及び「苦しい」という項目に確認された。『日本国語大辞典』（第2版）においても「たいぎい」という項目があり、方言として「おっくうである。めんどうである。つらい。体がだるい。」の意味があるとしている。さらに『日本国語大辞典』には、「大儀」の項目がある。意味区分を以下に示す（用例は略）。

- ①重大な儀式。国家の儀式で官人すべてが参列するもの。元日朝拝。即位式および外国使節接見等
- ②表立った儀礼的な催し事。大がかりな法要や演能。
- ③（形動）重大な事柄。大きな政治的事件や騒乱。大事なこと。また、そのさま。
- ④経費のかかる事柄。経費を多くかけること。ふんばつすること。また、そのさま。
- ⑤（形動）やっかいなこと。困惑すること。めんどくさいこと。また、体調が悪くてつらいこと。また、そのさま。
- ⑥（形動）他人の骨折りをねぎらい慰労することば。ごくろうさん。御苦労。

⑤が現在、広島県安芸地域で使用される「タイギー」に近い。⑤の用例として『吾妻鏡、仁治二年一月三〇日』の「武衛斟酌、頗似大儀」、『毛詩抄（京大二十冊本）』の「又米にしても〈略〉運送が大義な程にぞ」、『日葡辞書』、『春色梅児誉美』の「今朝は化粧をするのも太義だ」、永井荷風の『あめりか物語』の「半ば其の眼を開くのさへ退儀らしく」などが挙げられている。中世から近代にかけて中央語で「やっかいだ、面倒だ」の意の形容動詞としての「たいぎ（大儀）」が用いられていたことが分かる。ただし、吾妻鏡の例は直後に「追って優賞あるべし」と続くもので、「武衛」（北条時頼）の「斟酌」を誉める表現となっており、「やっかいだ、面倒だ」という意味からは外れている。中央語でこの形容動詞としての用法が確立するのは中世後期の15、16世紀とみるべきかもしれない。『角川古語大辞典』の「大儀」の項目においても、「精神的にも肉体的にも疲れること。しんどいこと。めんどう、やっかい。」とあり、用例として『日本国語大辞典』と同じ『日葡辞書』が挙げられている。さらに、室町時代における語の実態を明らかにした『時代別国語大辞典 室町時代編』においても「③その実行・成就に並並ならぬ手間、労力などがかかるさまであること。また、そういう事態を、骨が折れて負担に思うさまであること。」とある。その用例は、室町時代後期に成立した『玉塵抄』である。

いずれも広島県安芸地域の「タイギー」に近い意味と用例が存在し、多くは15、16世紀ごろの文献で確認できる。このことから「大儀」は、元々の「重大な儀式」という意味から15、16世紀頃

に「やっかいなこと。困惑すること。めんどくさいこと。骨が折れて負担に思うさま。」という意味に転じたと考えられる。この「大儀」が、広島では「タイギー」とイ形容詞化して残っているのである。

また『日本国語大辞典』の⑤の用例に「又米にしても〈略〉運送が大儀な程にぞ」とある。これは、「運送」という事柄に対して「大儀」（やっかいだ、面倒だ）という評価的属性を与えているととれる。その一方で、永井荷風の『あめりか物語』の「半ば其の眼を開くのさへ退儀らしく」という用例は、ある人が自身の目を開くことさえ「大儀」らしいということである。ここでの「大儀」は、人がある事柄をつらく感じるという、人の感情・感覚を表す意味にとれる。つまり、「大儀」は、評価的属性の意味と主体の感情や感覚を表現する意味の両面がある。

広島方言の「タイギー」は、上述のとおり方言資料では「しんどい、おっくう、めんどう、体がだるい」という意味だとされる。これは、主体の感情や感覚を表す意味である。しかし、「タイギー」に評価的属性の意味がないわけではない。例えば、「雨が降っていて出かけるのがタイギー。」という場合は、雨が降っていたので出かけるのが面倒だということであり、事態に対する主体の感情を表している。一方、「雨がタイギー」という場合、「雨」という対象を評価しているともとれる。つまり、「タイギー」は評価的属性の意味も有していることになる。広島県安芸地域で使用される「タイギー」に関して、属性的な使用をするのかを含めて検証が必要である。

花岡（2002）は、広島県大竹市における疲労感を表す形容語彙について記述しており、その中で「タイギー」の評価的属性に触れている。花岡は、従来対人評価語として用いられなかった「タイギー」が、若年層において「オマエ タイギー」のような形で使用されていることを確認したとする。ただし、30代後半から60代前半の男女10名に質問した調査では、「タイギー」が上のような対人評価語として使われることを確認できなかったとしている。「タイギー」の対人評価の意味の存在とその世代差について、改めて検証する必要がある。

3. 2 「ヤネコイ」

「ヤネコイ」は、『日本方言大辞典』において見出し「ヤニコイ」のもとにその変異形の一つとして挙げられている。見出し「ヤニコイ」には25項目の意味区分があり、そのうち21区分に「ヤネコイ」の形が掲載されている。それらを概観すると、西日本、特に中国地方に広く分布していることが確認できる。広島県で確認できるのは「(11) 難しい。困難だ。(12) 苦しい、つらい。」である。「(11) 難しい。困難だ。」は事柄の評価であり、属性的な使用である。一方で、「(12) 苦しい、つらい。」は、主体が有している感情・感覚である。

藤原（1996）は「ヤネコイ」の意味を「めんどうでほねがおれることを言うもの」とし、ねぎらいの言葉としても用いるとしている。さらに広島県師範学校郷土研究室の調査結果（1932）において、「ヤネコイ」は「辛い」とあり、『広島県方言辞典』には「主に仕事の難しさ、辛さをいう」とする。

「やに」は「脂」であり、「やにこい」は『日本国語大辞典』によると「(1) やにが多い。粘りけが多い。やにっこい。」「(2) あっさりしない。しつこい。くどい。やにっこい。」「(3) かよわい。もろい。こわれやすい。やにっこい。」とある。これらを踏まえると、広島県で確認される「ヤネコイ」は「困難さ」といった事態に対する評価的属性の意味と「つらい」といった主観的な感情・感覚の意味があることになる。

3. 3 「シワイ」

『日本方言大辞典』では、「シワイ」の意味を18に分けている。分布を見ると西日本、特に中国地方に多くみられるが、東日本にも存在する。広島県で確認できる意味区分は「(1) 木などがしななって折れにくい。」「(6) しつこい。くどい。」「(7) 肝が据わっている。一筋縄ではいかない。」「(9) 骨が折れて苦しい。難儀だ。」である。

広島県師範学校郷土研究室編(1932)では「シワイ」は「骨が折れる」とあり、『広島県方言辞典』では「しんどい、くたびれた、だるい、退屈な。辛い、息苦しい。」とある。田淵(1977)は、広島方言の「シワイ」を「胸苦しく、息の詰まるような感じをいう」としている。また「広く強情な意味にも、食物の歯切れの悪い意味にも、気むずかしい意味にも使う」とある。田淵がここで示しているのは『日本方言大辞典』の「(2) 芯(しん)があったり繊維質だったりしてかみ切りにくい。歯切れが悪い。」「(8) 強情だ。しぶとい。片意地だ。」にあたと考えられるが、『日本方言大辞典』においてその意味での広島県内の資料は確認されない。広島方言の「シワイ」の意味で共通しているのは、主体が特定の事柄に対して困難だと感じているということである。

『日本国語大辞典』では「シワイ」は「金銭などを出し惜しみするさま。けちだ。しみったれている。」という意味が挙げられており、『日本方言大辞典』の意味区分とは異なる。『角川古語大辞典』の「しわしわ」という項目に「胸がしめつけられて、しんみりとするさま」とあり、むしろこちらの意味の方が現在の広島県方言における「シワイ」の意味に近い。現在の広島県方言における「シワイ」は中央語の「しわしわ」から派生したと考えられる。

3. 4 『中国地方言語地図』

広島県安芸地域周辺部における「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」の3語の地理的分布をみるために、岸江他編(2019)『中国地方言語地図』を参照する。これは、「中国地方の方言に関する通信調査」として2014年に中国地方の55歳以上の男女にアンケートを行い、その結果を記号で地図上に示したものである。

『中国地方言語地図』には《身体的苦痛(全体)》の語を尋ねた項目があり、「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」の分布が確認できる。「タイギー」は、安芸地域の島嶼部から沿岸部にみられるのに対し、「ヤネコイ」は広島市内のみに分布する。「ヤネコイ」は本稿の調査でも確認できることから、広島市を中心とする安芸地域の中心部で使用される語であると思われる。

一方、「シワイ」は広島県の安芸北部・備後北部から島根県にみられる。つまり、「シワイ」は広島県芸北むしろ島根県に多くみられる語であり、安芸地域の中心部ではあまり用いない表現であることが推測される。

4 調査内容

筆者が行った調査について述べる。質問項目に関しては、花岡(2002)および真田・友定編(2015)の『県別方言感情表現辞典』と真田・友定編(2018)『県別方言感覚表現辞典』、岸江他編(2019)『中国言語地図』を参考に作成した。表2が質問項目とそれに意味ラベルを付けたものである。意味ラベルは、結果を分析するために、調査後設定したものである。アンケートでは質問文の下線部のことばを何というかを訊いた。複数回答可として、予想される語形式を複数例示し、使用語形を記入してもらった。下線部の共通語形の表す意味に最も近い語形を答えてもらうという意図だったが、質問文の文脈に当てはまる語であれば回答可能になってしまっている。例えば、項目番号6番

「同じことをするのはめんどくさい」という質問文の場合、「めんどくさい」に当たる意味の言葉は何かという場合と、「同じことをするのは○○○○」の○の部分に当てはまる語はどのような語かという2パターン考えられてしまう。そこで、結果の分析・考察のための意味ラベルの設定は、基本的には共通語形の意味を参考にしつつも、質問文の文脈を踏まえたものとした。

表2 質問項目と意味ラベル

項目番号	質問文	意味ラベル
1	今日は働きすぎて、もう身体が <u>しんどい</u>	《身体的苦痛（全体）》
2	かぜをひいて咳（せき）が出て、胸が <u>苦しい</u>	《身体的苦痛（部分）》
3	病気で何も食べられず、 <u>つらい</u>	《精神的苦痛》
4	朝から晩まで仕事だったので、 <u>疲れた</u>	《疲労感》
5	熱があり、体が <u>だるい</u> 。	《倦怠感》
6	同じことをするのは <u>めんどくさい</u> 。	《行動への消極的態度（面倒くさい）》
7	雨が降っているし、今から出かけるのは <u>おっくうだ</u> 。	《行動への消極的態度（億劫）》
8	近所付き合いが、 <u>わずらわしい</u>	《事柄の煩雑さに対する評価》
9	電車の中で騒いでいる人たちに対して思う <u>不快な気持ち</u>	《人に対する不快感（音）》
10	小学生のいたずら坊主がつきまどってきて <u>うっとうしい</u> 。	《人に対する不快感（接触）》
11	雨でズボンのすそが濡れて「 <u>不快だ・気持ちが悪い</u> 」	《水気に対する不快感》
12	朝から <u>憂鬱だ</u>	《精神的抑圧・沈滞感》
13	腹が立ってイライラし、気分が悪いとき、 <u>思わず発する言葉</u>	《いらだった時のことば》

項目番号1番と2番は、どちらも身体に関する苦痛を表すが、前者が身体全体、後者が胸という身体の一部である違いがある。そのため、前者を《身体的苦痛（全体）》、後者を《身体的苦痛（部分）》とした。項目番号3番の質問文は、共通語形「つらい」が表す意味とこの文脈がともに《精神的苦痛》を表すと判断した。

項目番号4番と5番の質問文は、「疲れた」と「だるい」を何というかを訊いている。共通語形の意味から、それぞれ《疲労感》と《倦怠感》とした。

項目番号6番と7番の質問文は、「同じことをするのはめんどくさい」と「雨が降っているし、今から出かけるのはおっくうだ。」である。これらは、語形を相互に置き換えられる質問文になっている。そのため、両者の文脈に共通している意味を設定し、それに共通語の意味を加え《行動への消極的態度（面倒くさい）》と《行動への消極的態度（億劫）》とした。共通語の「面倒くさい」は「同じことをすること」という事柄に対する評価的属性を表すとも言え、この点で「億劫だ」とは

区別できる。

項目番号 8 番の質問文は、近所付き合いという事柄に対して「煩わしい」と評しているため、《事柄の煩雑さに対する評価》とした。これも事柄に対する評価的属性といえる。

項目番号 9、10、11 番の質問文は、いずれも不快感を表すものであるが、対象が異なるためそれぞれ《人に対する不快感（音）》、《人に対する不快感（接触）》、《水気に対する不快感》とした。特に項目番号 10 番の「小学生のいたずら坊主がつきまどってきてうっとうしい。」という質問文は、対象となる人（ここでは「いたずら坊主」）に対する評価的属性という側面も有している。

項目番号 12 番の質問文は、「憂鬱」を訊いていることから《精神的抑圧・沈滞感》とした。項目番号 13 番は「腹が立ってイライラし、気分が悪いとき、思わず発する言葉」を訊く質問文だが、唯一、意味ではなく状況を説明的に与えて回答してもらおう設問となっており、《いらだった時のことば》とシラベリングした。

以下、これらの項目の回答から「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」の 3 語について考察していく。

5 調査結果と考察

5. 1 「タイギー」

今回の調査では最も多くの項目で確認された。項目番号 3 《精神的苦痛》以外のすべての項目で「タイギー」という回答がみられた。それを世代別、意味ラベルごとに分けたのが、表 3 である。およそ全ての世代で使用が確認されたのは、《身体的苦痛（全体）》、《行動への消極的態度（面倒くさい）》、《行動への消極的態度（億劫）》、《倦怠感》、《精神的抑圧・沈滞感》である。これは、3.1 節で確認した広島県安芸地域の「タイギー」の意味範囲と一致する。ただし、項目番号 8 番の《事柄の煩雑さに対する評価》など評価的属性の意味での使用が確認できる。

「身体がだるいこと」つまり《倦怠感》は、表 3 をみると年代が若くなるにつれて減少している。逆に《行動への消極的態度（面倒くさい）》、《事柄の煩雑さに対する評価》、《人に対する不快感（接触）》は年代が若くなるにつれて使用する割合が増加している。《事柄の煩雑さに対する評価》は、対象を評価するという属性的な用法であり、属性的な用法が若年層で広がっていると考えられる。

また、《人に対する不快感（接触）》は、前節で述べた通り、人の評価を表している側面がある。これは花岡（2002）が示した「タイギー」の対人評価な用法にあたる。特に若年層が使用する割合が高いことから、若年層は「タイギー」を対人評価的に用いていることがいえる。さらに、若年層において《人に対する不快感（音）》、《水気に対する不快感》、《いらだった時のことば》も確認できることから、「タイギー」の意味範囲が《疲労感》《倦怠感》も含めた《身体的苦痛》から、事物や人に対する《不快感》へと拡大（ないし転移）しつつあるといえる。

『日本方言大辞典』によると「タイギー」は「つらい」という意味を有している。ただし、今回「つらい」にあたる《精神的苦痛》の意味では確認できなかった。さらに、《身体的苦痛（部分）》も 70 代と 80 代にわずかに確認されるのみであり、部分的な苦痛では使用しづらいといえる。

表3 「タイギー」の使用の割合（人）

項目 番号	意味ラベル	10,20代	30,40 代	50代	60代	70代	80代 以上
1	《身体的苦痛（全体）》	22.2% (6)	27.8% (5)	28.6% (4)	46.7% (7)	22.2% (4)	30.0% (3)
2	《身体的苦痛（部分）》					5.6% (1)	10.0% (1)
4	《疲労感》	11.1% (3)		28.6% (4)	20.0% (3)	11.1% (2)	20.0% (2)
5	《倦怠感》	7.4% (2)	13.6% (3)	28.6% (4)	13.3% (2)	11.1% (2)	30.0% (3)
6	《行動への消極的態度（面倒くさい）》	70.4% (19)	44.4% (8)	35.7% (5)	26.7% (4)	11.1% (2)	20.0% (2)
7	《行動への消極的態度（億劫）》	29.6% (8)	55.6% (10)	42.9% (8)	40.0% (6)	38.9% (7)	40.0% (4)
8	《事柄の煩雑さに対する評価》	25.9% (7)	16.7% (3)	7.1% (1)	6.7% (1)		
9	《人に対する不快感（音）》	7.4% (2)			6.7% (1)		
10	《人に対する不快感（接触）》	29.6% (8)	5.6% (1)	7.1% (1)	13.3% (2)		10.0% (1)
11	《水気に対する不快感》	11.1% (3)	5.6% (1)	7.1% (1)			
12	《精神的抑圧・沈滞感》	33.3% (9)	33.3% (6)	50.0% (7)	66.7% (10)	27.8% (5)	40.0% (4)
13	《いらだった時のことば》	18.5% (5)	16.7% (3)	7.1% (1)			

5. 2 「ヤネコイ」

「ヤネコイ」の使用状況を示したものが表4である。

「ヤネコイ」は、《身体的苦痛（全体）》と《身体的苦痛（部分）》の項目において、おおよそすべての世代で確認できた。《身体的苦痛（全体）》は70代、80代以上の割合が高いのに対し、《身体的苦痛（部分）》は各世代にわずかに確認できる程度である。身体の部分の苦痛よりは身体全体の苦痛を言う方が使いやすいと考えられる。今回の調査では評価的属性の意味での使用は、確認できなかった。

表4 「ヤネコイ」の使用状況の割合（人）

ヤネコイ	10,20代	30,40代	50代	60代	70代	80代以上
《身体的苦痛（全体）》	7.4% (2)		7.1% (1)	6.7% (1)	27.8% (5)	50.0% (5)
《身体的苦痛（部分）》	3.7% (1)	11.1% (2)	7.1% (1)	6.7% (1)	16.7% (3)	10.0% (1)
《疲労感》					11.1% (2)	

5.3 「シワイ」

「シワイ」と回答した人は、5名と少なかった。3.4節で述べた通り、安芸地域の中心部ではあまり用いない表現であるといえる。『日本方言大辞典』においても、広島県比婆郡や広島県賀茂郡、佐伯郡に確認されるとあり、『広島県方言辞典』にも芸北を主に県北に分布とある。「シワイ」は現在においても、県北に分布し、安芸地域の中心には広がっていないと考えられる。

5人が「シワイ」と回答した項目を表5に示す。数は少ないが《身体的苦痛（全体）》と《身体的苦痛（部分）》のどちらの意味でも確認できる。これは、3.3節で述べた意味と共通する。「タイギー」「ヤネコイ」との違いは、《精神的苦痛》の意味で用いられている点である。

表5 「シワイ」と回答した項目と回答者

性別	男性	男性	女性	男性	女性
年齢	22	22	52	無回答	78
《身体的苦痛（全体）》	○	○	○		
《身体的苦痛（部分）》	○		○	○	
《精神的苦痛》	○		○		○
《倦怠感》	○				

5.4 「タイギー」の多義化

「タイギー」、「ヤネコイ」、「シワイ」と取り上げたが、今回の調査で「タイギー」が多義化し用法が拡大、さらに若年層においては意味が転移しつつあることが分かった。同じ語でも若年層と老年層では、用法・意味が異なるということである。特に差が生じた《行動への消極的態度（面倒くさい）》と《人に対する不快感（接触）》を取り上げる。それら各世代の解答をまとめたものが、図2と図3である。

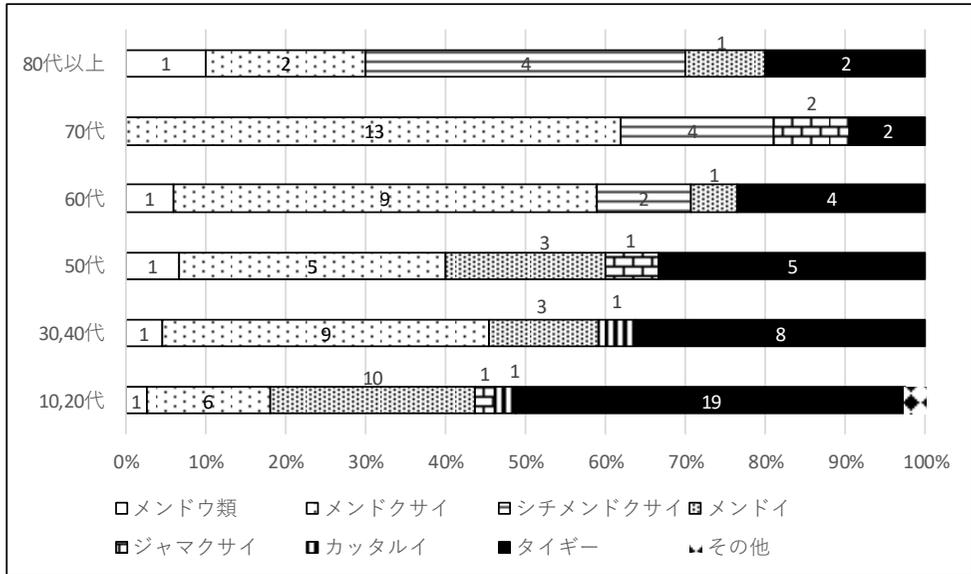


図2 《行動への消極的態度（面倒くさい）》

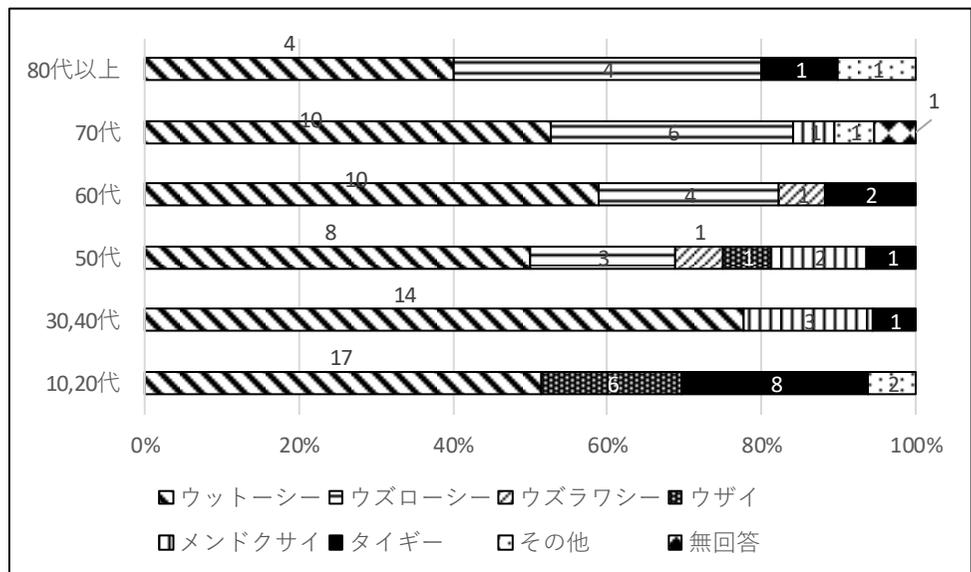


図3 《人に対する不快感（接触）》（うっとうしい）

《行動への消極的態度（面倒くさい）》の意味では、「10,20代」において、「メンドクサイ」という共通語形の回答は少なく、最も多い回答は「タイギー」であり次いで「メンドイ」であった。「シチメンドクサイ」という形からシチが取れ、「メンドクサイ」となり、短縮形の「メンドイ」となったことが予想されるが、「タイギー」も増えていることがわかる。

《人に対する不快感（接触）》において安芸地域の方言形である「ウズローシー」の使用が確認できるが、世代が若くなるにつれて減少している。その代わりに「タイギー」が台頭し、若年層で

は《人に対する不快感（接触）》で使われていることがわかる。また「ウザイ」も若年層で確認される。「ウザイ」は、「あいつウザイ」や「ウザイ奴」といった人の評価的属性として使用される。「ウザイ」と「タイギー」が若年層において増えていることから、「タイギー」は「ウザイ」と同じ用いられ方をしていると推測される。この質問は「小学生のいたずら坊主がつきまどってきて〇〇〇〇。」であり、回答する部分は、対象となる人（ここでは「いたずら坊主」）に対する評価的属性という側面も有している。このことから、「タイギー」が評価的属性を有しているといえるが、「ウザイ」と同様な使用は今回の調査では確実に確かめられない。筆者の同世代や広島市内の中学生に確認したところ、「あいつタイギーな」や「タイギー奴」といった「タイギー」の使用を認めており、人の評価として「タイギー」を使用していることがわかった。「タイギー」は、若年層において「ウザイ」と同様の用が広がっていることが窺える。

6 おわりに

本稿で明らかになったことを語ごとにまとめる。

「シワイ」は、《身体的苦痛（全体）》、《身体的苦痛（部分）》、《精神的苦痛》を表す。「タイギー」、「ヤネコイ」と異なり、《精神的苦痛》を表すことが可能であるが、安芸地域の中心部というより周辺部、芸北、備北にみられる表現である。

「ヤネコイ」の中心的な意味は《身体的苦痛》である。70代、80代以上では《身体的苦痛（全体）》の意味での回答が多いことから、「ヤネコイ」の基本的意味は《身体的苦痛（全体）》にあると考えられる。『中国地方言語地図』も参照すると、安芸地域の中心部で使用する語だといえる。しかし、60代以下では「ヤネコイ」と回答する人は減少し、代わりに「タイギー」と回答する人が増加している。つまり、「ヤネコイ」は、《身体的苦痛（全体）》の意味を持ち、安芸地域の中心部において用いられたが、現在では衰退し、代わりに同じ《身体的苦痛（全体）》の意味を持つ「タイギー」を使用するようになったと考えられる。

「タイギー」は、《身体的苦痛（全体）》、《行動への消極的態度（面倒くさい）》、《行動への消極的態度（億劫）》、《倦怠感》、《精神的抑圧・沈滞感》を中心的な意味として有している。ただし若年層において《倦怠感》の使用は、減少している。一方で、《行動への消極的態度（面倒くさい）》、《事柄の煩雑さに対する評価》、《人に対する不快感（接触）》の使用が増えており、若年層において対象の評価的属性を表す意味での使用が広がっているといえる。さらに、《人に対する不快感（音）》、《水気に対する不快感》、《いらだった時のことば》も確認できる。若年層において「タイギー」の意味範囲が《疲労感》《倦怠感》も含めた《身体的苦痛》から、事物や人に対する《不快感》へと拡大（ないし転移）しつつあるといえる。

本稿は、アンケート調査や文献調査から得たデータをもとに分析を行った。しかし、アンケートという調査方法の性質上、意味・用法は概略的にしか把握できず、また、調査内容、項目にも問題があった。臨地面接調査などを行うことにより、これらの語形の意味・用法、あるいは、感覚・感情語彙全体についてのより詳しい記述的・言語地理学的研究が可能になるだろう。

参考文献

- 神島武彦（1998）『広島県のことば』明治書院
岸江信介・清水勇吉・塩川奈々美・林琳編（2019）『中国地方言語地図』徳島大学日本語学研究室
小西いずみ（2017）「広島県三次市方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集（3）活用

体系 (2)』(科学研究費成果報告書)、pp.115-126.

真田信治・友定賢治編 (2015)『県別方言感情表現辞典』東京堂出版

真田信治・友定賢治編 (2018)『県別方言感覚表現辞典』東京堂出版

小学館国語辞典編集部編 (1989)『日本方言大辞典』小学館

小学館国語辞典編集部編 (2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館

田淵実夫 (1977)『広島の方言とその語源』鼎出版

尚学図書編 (1989)『日本方言大辞典』小学館

中村幸彦・阪倉篤義他編 (1999)『角川古語大辞典』角川書店

花岡健吾 (2002)「広島県大竹市方言における疲労感を表す形容語彙」『国文学攷』第 175 号 pp.1-13.

平山輝男他編 (1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院

広島県師範学校郷土研究室編 (1932)『広島県方言の研究』藝文堂書店

藤原与一 (1996)『日本語方言辞書 昭和・平成の生活語 上・中・下』東京堂出版

村岡浅夫編 (1981)『広島県方言辞典』南海堂

室町時代語辞典編修委員会編 (1994)『時代別国語大辞典 室町時代編三 (さ～ち)』三省堂

付記 本稿は、国語教育カフェ (2019年6月22日 於広島大学) にて発表した内容に修正を加え
まとめ直したものである。ご指導いただいた先生方に改めて感謝申し上げます。調査に際して地元
公民館や地元の方々など、多くの人にご協力いただいた。調査にご協力いただいたすべての皆様に
心よりの御礼申し上げます。

(広島大学大学院博士課程前期2年)